

主題聖句: コリントの信徒への手紙 一 7章20節「おのおのは神が呼んでくださった、その招きに応える者でありなさい」(本田哲郎訳)。

「信仰者として召された人は、各々召された時の境遇に留まりなさい」(『フランシスコ会訳』)。

「おのおの召されたときの状態にとどまっていなさい。召されたときに奴隷であっても」(『聖書協会共同訳』v.21a 含む)。

ἕκαστος ἐν τῇ κλήσει ἧ ἐκλήθη, ἐν ταύτῃ μενέτω.

エカストス エン ティエイ クレイセイ エイ エクレイセイ エン タウテエイ メネトオウ

### <序>

パレスチナ問題について、下記のように、書きました<sup>1</sup>。

「パレスチナ、中東のテロについて、神は侮られる方ではない。政治家、戦禍をもたらした指導者は、コロナ禍にあっても、教育・医療・福祉をパレスチナの人々にもたらそうとしない。70年以上になる。そんな連中の祈禱師になってしまった薄情な宗教家こそメタノイア(悔い改め)すべきだろう(ローマ 1:31)」と。「薄情な」とはギリシア語 **ἄστοργος** アストルグース(<στοργή ストルゲー「愛情」から派生(自然の情愛を欠く、愛情のない、無情な)の意)です(ローマ 1:31)。政・官・財・学、メディアだけでなく、宗教家も「無知、不誠実、無情、無慈悲」と大衆の目には映ります。戦禍、地震、津波などで困窮している人々の救いはどこからもたらされるのでしょうか。宗教を遍歴してきた結果、地平線にうっすらと見えてきた光景はおぞましい闇でした。長いトンネルをもはや抜け出られないのかと窒息しかかっています。隣の医療施設からもれる目に見えないコロナウィルスの蔓延。発狂しそうになる無策のつけにのたうち回っている隣人たちとどのように生きていけばいいのでしょうか。

今朝から3週にわたって、筆者の「奴隷」根性についてお分かちささせていただきます。気持ち悪ければ、いつでも退出なさってけっこうです。ゴキブリのように何度も叩き潰されても筆者が残り続けてきたのはなぜでしょうか。これぞ神の存在が見えてきた証しです。しぶとく生きてきました。いかに人々から嫌われようがまだ臭い息をしています。「奴隷」からの「解放の神学」について語らせていただきます。

#### WCRPの報告

### 「宗教者こそが平和への先導役」

京都市左京区の国立京都国際会館で8月26日から4日間にわたって第8回世界宗教者平和会議(World Conference of Religions for Peace: WCRP・1970年の第1回京都世界大会以来、世界各地で約5年毎に開催)が開かれました。世界100カ国・地域から約2000人の仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教などの宗教指導者が集まりました。当初、2004年ごろに、ニューヨークで開催する予定でした。9・11テロとその後のアフガニスタン、イラク戦争により中断していました。「宗教間の紛争がなく安全な都市」(関係者)として、発祥の地京都に集うことになりました。開会式には、来賓として小泉首相も出席。他に、サイード・ムハンマド・ハタミ(イラン・イスラム共和国前大統領)、アン・ヴェネマン(ユニセフ事務局長)、エル・ハッサン・ビン・タラール(ヨルダン王国王子、WCRP国際実務議長)、ケル・マニエ・ボンデヴィク(ノルウェー王国前首相)などもメッセージを語りました。「暴力に対抗し共通の安全保障を促進する(Confronting Violence and Advancing Shared Security)」が会期中のテーマでした。米国はイランの元大統領の入国をたたくに拒んでいました。本会で26日、27日にハタミ師がイスラム教徒が平和と安全と推進に対して役割を果たすべきだとスピーチしました。米当局は29日、手のひらを返したように急遽ハタミ師に入国ビザを発給しました。中東諸国からの有力参加者により、議論はおのずと政治的な問題についても、特に非公式なセッションでかなり踏み込んだものが展開されました。たとえば、イラクで対立するスンニ派やシーア派のイスラム教指導者ら

10数人が「スンニ派であれシーア派であれ、一般の人が殺される状況は受け入れられません。あらゆる差別を捨て、すべての宗教、すべての人類、人間性を尊重」と、シーア派宗教大臣のサイード・サレ・アルハイダリさんが代表して平和を呼び掛ける共同声明を発表しました。イスラム教の聖職者は会期中、一貫して、テロを非難し、イラクには外部からの聖職者の部隊が残忍なテロ活動を起していると言いました。最終日の29日、「宗教が暴力の正当化に利用されており、さまざまな宗教は協力して戦争や貧困、教育などの問題解決に尽力する」とする「京都宣言」を採択し閉幕しました。

世界各地で人類が直面している紛争、餓死、貧困、AIDSやHIVの問題は、実際に宗教者が解決のため取り組んでいる事例をあげながら論じ合いました。問題は覇権主義や、政治家の野心によって宗教が利用されている現実を直視し、宗教者が国境、言語、個々の正義を乗り越えて、連帯することによって、和平に向かおうとする祈りと行動が展開しました。イスラム教とユダヤ教の最高位も他者の痛みを共有し、女性や子どもたちに災いが及ばないように同じ思いをしていることを分かち合いました。マスコミに名前を出せない中東の最高責任者たちも多く出席したからこそ、実りの多い国際会議だったと思います。

(岩村義雄記)



制度宗教は紛争における孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者を守れるだろうか。

(拙稿『KBH ニューズレター』(2012年8月 2頁)。

1 拙稿「パレスチナの悲劇に無関心であってよいのか」(2021年 エラスムス平和研究所)。

- (1) 逃避の神学から脱皮
  - a. 神学の選択 2
  - b. 階層を好む宗教 2
  - c. 「聖」と「俗」 3
- (2) 聖書原典は今日でも有効である。なぜなら聖書には貧しい者・抑圧された者の解放があるから
  - a. 神学ではなく、聖書原典に貫かれる真理 3
  - b. 聖書原典からのイエスの生き様 4
  - c. 体制のイデオロギーと化した神学は聖書と無縁である 4
- (3) パウロは奴隷制度肯定論者か
  - a. 差別社会の影響を聖書は受けている 5
  - b. あなたは弱者をかばいますか 6
  - c. パウロは奴隷制を容認していたのか 7

(1) 逃避の神学から脱皮  
a. 神学の選択

すべての神学概念は二つの意味で解釈できます。言葉や観念の使い方がその言葉の真理性を決定し、実践が理論を決定します。

ネパールでは、ダリット Dalit 不可触民が(ヒンドゥー社会の中でも最下層階級「触れると穢れる人間」「困窮した人々」「押しつぶされた人々」「抑圧されている人々」)『ヴィシュヌ法典』(100～300 年頃)に登場。アンタッチャブルの階層の人々です。通りで靴磨き、廃品回収、散髪などをされています。ヒンドゥー教のカースト制度から逃れるために、仏教やキリスト教に改宗される場合があります。「宗教」のヒエラルキーの抑圧から解放されるために、バレーボールのコートをチェンジするのです。しかし、所属が変わったとしても、賤民に「無関心」な罪性がある宗教組織に抱いていた希望も幻想であったことに気づきます。

三代目のローマ・カトリック教徒として、聖イグナチオ教会で幼児洗礼を受けました。勉強もそっこのけで、野原をかけずりまわっていました。内奥からの希求として原理運動、モルモン教、エホバの証人に真理があるのかと探究しました。ものみの塔協会には 13 年間在籍し、千年王国こそが人類を解放する神の目的だと確信していました。これで楽園に行けるぞ、罪が赦されたのもう何もいらぬ、家族もみな健やかだ。しかし、親戚、近隣、海外では、呻いている人がいるのではないかの現実を黙視することに疲れます。

自己救済で完結できない他者の嘆き、苦悩、悲しみからの解放について、9・11テロ以降、神経が研ぎすまされるようになりました。教会の言う神の国、御仏の説く、生老病死愛別離苦・怨憎会苦(おんぞうえく)・求不得苦(ぐふとくく)・五蘊盛苦(ごうんじょうく)からの解放だけでは、自然災害の被災者、テロの犠牲者、階級社会の差別に「薄情」なのでは、と迫られます。

b. 階層を好む宗教

ビームラーオ・ラームジー・アンベードカル[1891-1956]は、ダリットの家で誕生。死の 2 か月前に約 50 万人の人々と共に仏教に集団改宗するほど影響力がありました。どんな宗教でも体制の権力、「貴」と宗教が結びつくときには差別する宗教になります。反対に「賤」の側に立つときには、同じ経典、教理、教義であっても、抵抗する宗教になります。はっきり言えることは、信仰者が、貴賤のパラダイムの中で、心情的にどちらに平安をもつかが分水嶺となります。解放の神学を選ぶか、抑圧的な神学を選ぶかの分岐点とも言えます。日本の中世社会は真ん中が天皇です。公家が周囲にいました。古代イスラエルも、真ん中

が大祭司です。それからファリサイ派が囲っています。その構図は地中海沿岸でできたキリスト教も同様です。真ん中に教皇様がいます。大司教、司教、神父様が囲っています。平信徒という聖書にない階層ができあがり、伝統的宗教エリート帝国を築き上げました。イエス・キリストは新しいエルサレムを造り、新しい戒めを造りました。「あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう」と「新しい戒め」の民として歩むように促されました(ヨハネ 13:34,35)。しかし、歴史的に導線を進ると、愛は自分たち仲間内だけの絆でした。

ローマ・カトリック教会、プロテスタント教会、福音派は、荘厳な会堂様式、民衆をうっとりさせるリタージェー、立派な肩書の宗教指導者などの装飾でヒエラルキーを存続してきました。キリスト教主義学校の典礼は痕跡を如実に物語っています。そこには「河原者」、「穢多」、「乞食」などが入り込めない神聖な領域です。

### c. 「聖」と「俗」

イエスが出会った民衆はギリシア語でオクロス(民)です。עַמְּהָאָרְצָא (ヘブライ語 アム・ハ・アーレツ <地の民, 土の人の意>)です<sup>2</sup>。「人々がイエスのところへ、いろいろな病気や痛みを苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々を癒された」(マタイ 4:24)。オクロスは、生産に従事しえない者、病気の者、知的身体的に障がいを持つ者、故郷を追われた放浪者たち。つまり「棄てられた者」、物乞いして歩くしかないアウトカーストでした。ファリサイ派や伝統的宗教から常に差別されてきた被差別者でした。「罪人」、「けがれたもの」、「常識がない」と定められた人たちでした。権力者や権威ある中心から離れた周縁に住むオクロスは「聖都」からは無縁の存在です。かつてエルサレムも、浄いイスラエル人たちが住む都でした。聖なるエルサレム神殿を中心に大祭司、貴族、律法学者たちの特権階級が占めていました。ユダヤ教徒にとり宗教の中心地であるエルサレムは世界のへそであり、神が臨在するシエキナーの象徴、聖い神殿でした。イエスは聖なる都ではなく、外側のゴルゴダの丘で処刑されました。「穢れ」た「辺境」、「非人」、「癩者」、「貧しい者」がいる荒れ地で地上の最後を遂げたのです。

「聖職者」はイエスの追随者でしょうか。たとえば、オクロスである知的障がい者が「聖職者」になれるでしょうか。残念ながら、外的召命である教師試験の資格はとれません。「聖職者」だけが「聖堂」で、「聖書」を説教できる制度が 3, 4 世紀に地中海沿岸でできました。聖い者だけが「キリスト教」(クリスティアニスム)の「聖職者」になることができます。「俗」は聖職にあずかることはできません。オクロスは「俗」だから「聖域」には入れません。聖書にない「キリスト教」は排他主義になり、1500年にわたり、「教会」に「逃避」し、聖書にない「聖堂」、「聖歌(讚美歌)」、そして聖なる祈りの伝統に陶醉してきました。

## (2) 聖書原典は今日でも有効である。なぜなら聖書には貧しい者・抑圧された者の解放があるから

### a. 神学ではなく、聖書原典に貫かれる真理

2012年8月26日から4日間の第8回世界宗教者平和会議で、筆者はハンス・キュングと話す機会がありました<sup>3</sup>。2008年、親交があるマー・グレゴリオス・イブラヒム(シリア正教アレppo大主教)氏と再会し、

<sup>2</sup> 「律法を知らないこの群衆は、呪われている」とファリサイ派は優越意識を持っていました(ヨハネ 7:49)。アム・ハ・アーレツとは、律法を知らない無学な者、浄めの律法を守らない者のこと。『荊冠の神学』(栗林輝夫 新教出版社 1993年 254-255頁)。

<sup>3</sup> ハンス・キュング[1928-2021] ローマ教皇無謬論を否定し、ミシオ・カノニカを剥奪されたローマ・カトリック教会の神学者。1962年に、教皇ヨハネ 23 世[1881-1963]より第二次バチカン公会議の公式神学顧問に指名。

イスラーム教に対する寛容な姿勢は印象に残りました。非寛容な制度宗教と異なる意見に目から鱗でした<sup>4</sup>。また出席者に、「イラクで対立するスンニ派やシーア派のイスラーム教指導者ら」の内に、結束の発題を聴きました。つまり宗派對立の虚実について大国の操作があることが白日の下にさらされました。宗派は政治的な目的のために道具として利用されているのです<sup>5</sup>。

昼食時、キュンクは、「公的になった教会に、教会固有の信者たちが次第に浸透していった。保守的な教会をつくりあげたのはキリスト者です」と言いました。さらに、「もしどこかの教会で、金持ちがその金の方で支配しようとするれば、そのときその教会は、もはやキリスト教会ではない」と財産問題について言及しました(ルカ 18:18-27, マルコ 10:17,27, マタイ 19:16-26)。聖書は、富や権力者たちが譴責されていることを繰り返します。アッジジのフランチェスコ[1182-1226]は、21世紀でも正しく評価されていません。たとえば、反資本主義革命、貧民の革命です。世俗的権力に同化しているキリスト教界であってはならないのです。神学者は隣人愛を口で言うだけではいけません。イエスご自身はラディカルな社会変革を唱えました。「私が来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。私は敵対させるために来たからである」と(マタイ 10:34-35)。

## b. 聖書原典からのイエスの生き様

「主なる神の霊が私に臨んだ。主が私に油を注いだからである。苦しむ人に良い知らせを伝えるため主が私を遣わされた。心の打ち砕かれた人を包み 捕らわれ人に自由を つながれている人に解放を告げるために」(イザヤ 61:1 עֲנִי アーナーヴ 民数 12:3; בְּשִׁירַבַּסָּר ンバサール〈to announce as good news〉)<sup>6</sup>。

「あなたは善意にみちみれみ深いかた、貧者 עֲנִי の避難所だからです。私があなたに叫んだら、私を避けて沈黙なさらないでください」(ソロモン詩歌 5:2 旧約偽典第五卷 教文館 1976年 36頁)。

アーナーヴは、旧約に 25 回出ています。英語では、poor に訳出されます。「モーセは地上の誰よりも謙遜な עֲנִי」のように、「貧しい」とは訳出しません(民数 12:3)。アーナーヴのギリシア語はプーコスです。新約に 37 回出ています。参照:ルカ 6:20, ヤコブ 2:2-5。したがって、「モーセは地上の誰よりも貧しい עֲנִי 人でした」と訳出すべきです。神は抑圧された民に常に目を注ぎます。

「弱い人のために正当な裁きを行い この地の貧しい עֲנִי 人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち 唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる」と神はアーナーヴの権利を弁護します(イザヤ 11:4)。

貧しい時代、肩を寄せ合って生きますが、貧しくなくなるとお互いに干渉もなくなります。人間関係が希薄になります。すると、ニート、ひきこもり、高校中退も珍しくなくなります。イエス・キリストの十字架は貧しい者・抑圧された者としてのイエスの死です。イエスの復活が特別なもの・つまずきであるのは、貧しく抑圧され、国家権力によって殺された者であるイエスの復活だからです。それゆえにイエスの復活は貧しい抑圧された者の希望なのです。

## c. 体制のイデオロギーと化した神学は聖書と無縁である

アウグスティヌスは、西暦 2 世紀に、現在のトルコで巻き起こった聖霊運動モンタノス派<sup>7</sup>、北アフリカ

<sup>4</sup> イランのハタミ前大統領も世界平和のために宗教者の役割を確認しました。拙稿『KBHニューズレター』(2012年8月2頁)。

<sup>5</sup> 『シーア派とスンニ派』(池内恵 新潮選書 2018年 45頁)。現在の中東政治において、宗派主義は最も効果的な政治的ツール……現に広く用いられており、今後も用いられていく。

<sup>6</sup> 『続小さくされた者の側に立つ神』(本田哲郎 新生社 2000年 58頁)

<sup>7</sup> モンタノス派は、西暦 135 年頃からの初期キリスト教運動。創設者モンタノス[生死年不明]が聖霊充滿をヨハネの福音書 16 章から説き、厳格な道徳と、教職者の墮落を批判。完全な階層の教会は、8 世紀まで存続。「三位一体」の教義を説いたテルトゥリアヌス[150/160-220 以降]も入信。

のドナトゥス派を批判。両者は宗教的階層や保守的な制度、権威、位階制よりも聖霊の満たしによる恍惚状態を願いました。アウグスティヌスは「教会の財産を承認しない者は、教会の外に立つ者だ」と、教会の財産を否定する者たちを教会の呪いとして反対しました<sup>8</sup>。教会非難の「告発」を容認しなかったのです。教会は隣人愛的、扶助的、援助的であれば、満足としました。保守的なキリスト教会を造り上げていきました。しかし、イエスご自身は、霊的にも比類のない革命家でありました。貧者を抑圧する社会的、政治的、硬直化した制度に対して、政治的革命家として行動しました。単なる霊的革命家であったならば、ローマ帝国によって処刑されることもありませんでした。もちろん霊的革命家として、ユダヤ教の宗教的位階制にノーと突きつけました。霊的革命家と政治的革命家を分離して考えるのはいかなものでしょうか。神学は、貧者の物質的要求よりさらに比重が高い心の奥底にある欲求を満たす神について考察することが使信です。しかし、ミサ聖祭の形式、聖人暦、位階制度を追究する保守的な宮廷神学になりさがれば、人々を解放することができません。制度は時代を経るに従って、当初の理想がなおざりにされます。人間のために制度があるのではなく、人間が制度のために存在するようになります。制度は本来、補助手段にすぎません。神学校が権力支配の仕方、道徳を徹底させるために教会規律、信者を指図する機関となっているなら問題です。福音は、より生き生きしているならば行動するはずです。(Qui vivra veerra……)。

人間の顔をした教会は、いわばコンピューターです。コンピューターは人間のために有用ですが、人間がコンピューターに全幅の信頼を置いて、絶対視するならば、それは筋違いです。「安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるのではない」と、効率、能率、便利さの神さまであるコンピューターを相対化する発想には革命が求められます。「少しも疑うことなく、信じて求めなさい」(ヤコブ 1:6)から、「神は惑わす力を送り、彼らが偽りを信じるようにされるのです」(I テサロニケ 2:11)へのメタノイア<sup>9</sup>です。宗教はマルクスが言うように、決してアヘンではありません。制度は、非歴史的(アヒスリッシュ)です。過去の歴史(ヒストリー)からもたらされる聖書の価値観は、常に弁証法的です(ἀπολογία アポロギア フィリピ 1:7,16)<sup>10</sup>。

したがって、制度を変革することだけではなく、同時に人間が変革されなければなりません。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を造り変えていただき、新しい衣を身につけるのです」<sup>11</sup>。

パレスチナの叫び、シリアの難民、アフリカの紛争などに、和解について希求するならば、自らを変革しなければならぬでしょう。保守的な聖堂は、この世の権力とむすびついた逃避場所になっています。制度宗教の衰弱の原因です。会堂で“主の平和”，と唱えれば平和が実現したと言えますか。「平和ではなく、剣をもたらすために来た」と述べるイエスは変革のために登場しました。イエスは、もはや聖殿では見いだせません<sup>12</sup>。被災地、紛争地、スラム街で出会うのです<sup>13</sup>。

### (3) パウロは奴隷制度肯定論者か

#### a. 差別社会の影響を聖書は受けている

「主はモーセに告げられた。『アロンに告げなさい。あなたの代々の子孫のうち、体に欠陥のある者は

<sup>8</sup> 「グラティアヌス『教会法』における正当戦争論の特色——国際法学説史研究」、『法政研究』26巻2号(1959 123-145頁)。

<sup>9</sup> メタノイア(同 22回)には、「罪を悔い改める」というより、因習、伝統、常識という固定概念から180度転換へブライ語シューブ 1075回。

<sup>10</sup> 拙論「石の叫びに敏感であろう」(2017年度キリスト教教育特別集会 宮城学院女子大学・大学院 12頁)。

<http://kicc.sub.jp/2017/05/25/%E3%80%8C%E7%9F%B3%E3%81%AE%E5%8F%AB%E3%81%B3%E3%81%AB%E6%95%8F%E6%84%9F%E3%81%A7%E3%81%82%E3%82%8D%E3%81%86%E3%80%8D/>

<sup>11</sup> ローマ 12章2節「自分を造り変え」(ギリシア語 μεταμορφῶ (メタモルフォー <μετά 変化+ μορφῶ 形作る)は外形だけでなく、内実からの変化の意)。さなぎから蝶へ、いわば「変態」トランスフォームされることです。

<sup>12</sup> 人間中心主義が「世俗化」を過度に推し進め、……寛容は価値相対主義の温床と化し、無関心な寛容へと流出し、ニヒリズムを招来。『キリスト教思想断層』(近藤 剛 ナカニシヤ出版 2013年 136頁)。

<sup>13</sup> 『キリストの未来と世界の終り』(ユルゲン・モルトマン 蓮見和男訳 新教出版社 1973年 62頁)。

神の食べ物を献げるために近づいてはならない。欠陥のある者は近づいてはならないからである。目の不自由な者、足の不自由な者、鼻が欠けている者、手足の不釣り合いの者、手足の折れた者、背骨の曲がった者、背丈が極端に低い者、目に白斑のある者、湿疹やかさぶたのある者、睾丸の潰れた者など、祭司の子孫で、体に欠陥のある者は誰でも、主への火による献げ物を献げるために近づいてはならない。欠陥のある者が神の食べ物を献げるために近づいてはならないのである。しかし彼らも、神の食べ物である最も聖なるものや、聖なるものを食べることはできる。ただし体に欠陥があるからには、垂れ幕の前に出てはならない。祭壇に近づいてはならない。私の聖所を汚してはならない』(レビ記 21:16-23)。

「聖所を汚してはならない」という神は潔癖症であり、ハンディキャップのある者は出入り禁止とは偏狭ではないでしょうか。どんな宗教も「浄」と「穢」の二つの「聖」観があります。ネパールではダリット層はアプリアリにカースト制から抜け出られない世界観が受容されています。「浄・不浄 / 聖・穢」という身分制があります。被差別部落の人は、極貧の生活の中でも寺院への寄附は喜んで行いましたが、あの世でも身分は引きずります。宮城県石巻市の西光寺で、樋口伸生副住職に見せていただいた墓碑には、「隸」<sup>せんだら</sup>、「畜」<sup>せんだら</sup>、「旃陀羅」の差別戒名が残っていました<sup>14</sup>。極楽浄土へ行けるはずではなかったのでしょうか。小学生だったとき、高野山を訪問しました。親王院の表門に、「汚穢不浄之者入門不許」があり、最初の「汚穢」(おえ)をどう読むかわからず、タイムマシーンがあっても昔の人とはお話しができないんだ、と子ども心に思ったりしました。相撲の土俵も同じように、女性も禁制だったのです。塩を撒いて清める儀式があります。神道は、葬式の際、塩を用いて、不浄を清める伝統を日本に定着させました。仏教の本来は塩を用いたりほしないと玉龍寺の五百井正浩住職は嘆かれます。穢れを避けるのは神の教えなのでしょう<sup>15</sup>。

## b. あなたは弱者をかばいますか

アウグスティヌスは、「聖書の中には理解できないことがたくさんあるが、それは翻訳した人の責任だ」と言いました。

「裁きにおいて不正をしてはならない。弱い者に偏ってかばってはならない」と主はモーセに教えました。日々の生活にも事欠き、息するのもやっとの「弱い者」(ヘブライ語  $\text{דַּל}$  <低い、貧しい、卑しい、寄るべのないの意>)に、「かばう」(ヘブライ語  $\text{נָשָׂא}$  ナサー <上げる、支持するの意>)と書かれています。

弱い立場にある人々に、「上げる」、つまりあなたは独りででもやっていけるだろう、法律も味方してくれるし、何も心配いらぬよ、というプレッシャーをかけてはいけないという文意です<sup>16</sup>。東日本大震災の直後の家族、家、友達を失った人々に、「あんたがしっかりしなければ、天国の奥さんは泣いているよ」、「ひとりていきていかなきゃ」、と収入の当てもなく、米びつに米もなく、子どもの弁当を作れない者に、やれやれと強要することが聖書原典の意味でしょうか。そうではありません。

たとえば、「ハーラム」( $\text{חֲרָם}$ 「聖絶しなさい」『新改訳』申命記 13:16)も、ともすると、皆殺しの意味にとられます。日本の民俗学者柳田國男[1875-1962]や、『風土 人間学的考察』(和辻哲郎)の影響でしょうか。唯一神教はこわいというイメージを日本の識者は例外なくもっています。

名詞形ヘレムの29回の内、13回がヨシュア記に出ています。セム語のハーラムには、「禁じる」、「聖とする」、「聖別する」の意味があります。ハーラムから「ハレム」、「娼婦」が派生しています。聖書の中で

<sup>14</sup> 『仏教にみる差別の根源』(林 久良 明石書店 1997年 238頁)。

<sup>15</sup> 新生児のからだを塩でこすった (エゼ 16:4) のは、宗教的に新生児をきよめるためであったという説『新聖書辞典』(金本悟共いのちのことは社 1993年 533頁)。“悪霊を追い払う精神的な機能 (「厄祓い」)” D.I. Block, Ezekiel 1-24 (Eerdmans, 1997 p. 475)。

<sup>16</sup> 『聖書と差別』(日本カトリック部落問題委員会 1998年 54頁)。

は、ハーラムはもっぱら祭司が用いる宗教用語です<sup>17</sup>。神への奉納物とするか、廃棄するかにより用いられます。大多数の用例では、使用禁止となったモノに用います。動詞の用例では、戦利品、家畜、貴金属、捕虜が「禁制に置かれること」を意味しています。そこから、攻略した地における全住民の絶滅、町の破壊という意味に解釈されていきます<sup>18</sup>。部族間、民族間紛争において、禍根を残さないための、「皆殺し」は、日本の武士たちや、中東を問わず紀元前2千年期では当たり前でした。絶滅を実行するだけの武力と統制力を持っていることが指導者の資質の証明なのではないでしょうか。織田信長[1534-1582]は自分の誕生日を神格化させた記録が残っています。古今東西頂上を目指す人間は神似化を追い求めた軌跡があります<sup>19</sup>。死後も、ウラジーミル・レーニン[1870-1924]はレーニン廟(びょう)で保存処理(エンバーミング)された遺体が尊崇の対象の例もあります。指導者、武将、預言者を「神」と表現することによって、聖絶を正当化することは日常茶飯事だったと推察できます。人間が行為主体となることは、「人間によって作り出された危険」、とドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックは指摘しています。人間が聖絶を行うのです。「第一に生態系の危機、第二に世界的な金融危機、第三に同時多発テロ以降の国境を越えたテロネットワークによるテロの危険性」、と社会学者村田充八は引用しました<sup>20</sup>。村田は「病んでいる」民主主義が十字軍の精神に変化する責任放棄の萌芽を嗅ぎ取っています<sup>21</sup>。弱者をかばう、戦時下のキリスト教会にとり、国家が「サルース」<sup>22</sup>になった危険がありました。国家からの優遇を喜んではいけません。ボランティアが「お上」の下部組織と認められて有頂天になってはいけませんと同じでしょう<sup>23</sup>。

### c. パウロは奴隷制を容認していたのか

奴隷制について、パウロはどのように主張していたのでしょうか。『聖書はもういない』と発刊された女性は、次のように言います。「パウロ神学とも呼ばれている難解な『ローマ人への手紙』こそ、キリスト教の土台と言えます。キリストの教えや生涯を綴った四つの福音書だけでは聖書は生まれなかつたろうし、接ぎ木されないうま歴史の舞台から消えていったでしょう」、と<sup>24</sup>。新約聖書学者の田川建三[1935-]は、パウロ的キリスト教が世界宗教になりえた理由について語りました。「その現実と観念とを逆転させる構造において、現実否定と現実肯定の両者を徹底的に主張することができるから」と<sup>25</sup>。田川は、コリントの信徒への手紙 一 7章20節について、「観念世界にあつてはとことんまで現実否定を叫ぶ。だから自由を求める奴隷はそこに救いを見出して、キリスト教集団へと吸収される。他方では、仮象とみなされた現実においては、体制の根幹たる奴隷制を承認する論理を提供する。だから奴隷を使用する自由人・中間的支配層も喜んでキリスト教を受け入れる」、と人間を不当にも奴隷として支配している支配力からの解放、未知の課

<sup>17</sup> 『古代イスラエルにおける聖戦』(G.フォンラート 山吉智久訳 教文館 163-164 頁)。

<sup>18</sup> 勝村弘也「聖戦とは何か?—聖書から学ぶ—」(憲法9条をノーベル平和賞に推す神戸の会 2015年 5頁)。

<sup>19</sup> “而して領内の諸国に布告し、市町村においては男女貴賤悉く彼の生れた五月の日にかの寺院に来て同所に納めた己の神体を拜むことを命じた。諸国より集った人数は非常に多く、ほとんど信ぜられざるものであつた”『イエズス会日本年報(上)』(村上直次郎訳 新異国叢書 1969年 207頁)。

<sup>20</sup> 「リスク化する国際社会と戦争責任—共生社会をめざして」(村田充八 日本キリスト改革派西部中会 2013年 7頁)。

<sup>21</sup> 『戦争と聖書の平和』(村田充八 晃洋書房 2018年 246頁)。

「十字軍」については、拙論「キリストはキリスト教だけのものではない」(3)d. “非戦の原始キリスト教団から十字軍へ”

<https://www.christiantoday.co.jp/articles/28951/20210105/christ-is-not-only-for-christianity-3.htm>

<sup>22</sup> サルース(ラテン語 Salus「健康」の意)。京都大学名誉教授水垣渉は「教会にとって危険となるサルース」について警告しています。「教会が教会であること」の危機が教会に生起するのは、教会が国家と社会から圧迫される時に限らない。むしろ、教会が国家と社会から認められる時である、と、「教会が社会と国家に向きあう時—歴史から学ぶ—」(日本キリスト改革派西部中会 2011年 18頁)。

<sup>23</sup> 『災害ボランティア』(渥美公秀 弘文堂 2014年 124,125,130頁)。日本災害救援ボランティアネットワーク理事長の渥美公秀教授は憂慮します。「秩序化のドライブ」によって、災害ボランティアによる被災された人たち一人一人への関心は薄まり、災害ボランティアが被災者を中心に据えて臨機応変に展開する特徴は見失われてしまった。

<sup>24</sup> 『聖書はもういない』(野原花子 幻冬舎 2020年 19頁)。

<sup>25</sup> 『批判的主体の形成』(田川建三 三一書房 1988年 114頁)。

題を待望する「人間の解放」が下層民の救いだと解説しています。日本学士院会員である荒井献[1930-]も、「パウロに『霊的なもの』と『自然のままのもの』という二元的、あるいは二分法的発想がある」と、パウロの奴隷制について説明します<sup>26</sup>。

「解放の神学」の視座から、奴隷制についてパウロの言葉を考えてみます。前述の三冊は、伝統的に貧者を抑圧してきたキリスト教会の断面図を浮き彫りにしています。パウロの立ち位置は、まるで、「文化神学」の預言者、忠実な翻訳者、体制擁護者です。パウロの奴隷制の廃絶にいたる道筋は一切示されていません。つまり差別社会への決別が伝わらない体制側にも都合の良い解釈です。おいしいごちそうを食べている学者たちが、飢餓、餓死寸前、空腹の貧者に、「そのままでないさい」と説教するならば、偽善にほかなりません。「言うだけで実行しないからである」と(マタイ 23:3)。

パウロがはじめてコリントの集まりを訪れた時、おそらく20人くらいのキリストに召されたメンバーがいたでしょう。1章26-28節に記されています。「きょうだいたち、あなたがたが召されたときのことを考えてみなさい。世の知恵のある者は多くはなく、有力な者や家柄のよい者は多くはいませんでした。ところが、神は知恵ある者を恥じ入らせるために、世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、世の弱い者を選びました。また、神は世の取るに足りない者や軽んじられている者を選びました。すなわち、力ある者を無力な者にするため、無に等しい者を選びましたのです」と。「世の弱い者」、「世の取るに足りない者」、(世の)「軽んじられている者」のような「無に等しい者」で構成された会衆でした。神の選び、召しは、モーセ、ギデオン、アモスなどでもアーナーヴです。一貫しています。職種に限らず広い意味での生活状態、暮らし向きが「召し」の状態です<sup>27</sup>。コリントを再訪問すると、パウロは失望しました。「あなたがたはすでに満腹し、すでに富んでいます」(I コリント 4:8)。独立直後から数年を経ると、様変わりしたアフリカ諸国のようです。コリントの教会は生活水準がよくなり、サロンと化してしまいました。貧しい人に感情移入する感性がなくなってしまったのです。

主題聖句のコリントの信徒への手紙一 7章20節の文脈を注視しましょう。「召されたときに奴隷であっても、それを気にしてはいけません。自由の身になれるとしても、そのままでないさい。主にあって召された奴隷は、主によって解放された者であり、同様に召された自由人はキリストの奴隷だからです」と(21,22節)。「奴隷」(ギリシア語 **δοῦλος** ドウーロス<自由人の身分を持たず主人に所有される身分>)であった状態から、「自由」(ギリシア語 **ἐλεύθερος** エリュウセロス<自由人である>)になることをすすめていません。なぜなら「知恵ある者」、「有力な者」、「家柄のよい者」との交わりを大切にするようになり、貧者に無関心と化していたからです。コリントのメンバーに「神の知恵」が増し加わった結果、知恵を誇るように高ぶっていました<sup>28</sup>。教会の中でも、学歴社会、資格優先、財政運営能力の知恵があるかないかで神の祝福の有無を確認する始末です。「知恵を探します」と世の基準を無感覚に取り入れます(I コリント 1:22)。キリストは御もとで持っていた「栄光」を捨てて、「かえって自分を無にして僕(ドウーロス)の形を」とられたことを人間は忘却してしまうのです(ヨハネ 17:5、フィリピ 2:7)。自由、知恵にあふれた自分に栄光を帰す有り様です。キリストの教えとパウロの神学はなんら変わっていません。パウロ自身もドウーロスを貫きました。パウロはコリントの信者に向かって言います。「あなたがたはキリストにあって賢い者となりました。私たちは弱く、あなたがたは強くなりました。あなたがたは栄えある者となり、私たちは誉れなき者となりました。……苦勞して自分の手で働いています」とパウロは天幕づくりの皮職人であることを

<sup>26</sup> 『初期キリスト教史の諸問題』(荒井献 新教出版社 1973年 61頁)。

<sup>27</sup> 『コリント人への第一の手紙講解』(榊原康夫 聖文舎 1984年 334-335頁)。

<sup>28</sup> ギリシア語 **σοφία** ソフィア<神の意志と目的への霊的洞察を基礎として、日常生活の一つ一つの事柄に対して正しく的確に判断して行動する応用力を含む><形容詞形「賢い」**σοφός** ソフォスの名詞形 I コリント 2:8>。



述べています(使徒 18:3)<sup>29</sup>。ナイフなどの皮革工具を用いて働いていたパウロたちの手は指の関節が太く、事務仕事の人たちのようなしなやかな手ではなかったでしょう。「労苦と骨折りを覚えているはずです。私たちは誰にも負担をかけまいとして、夜も昼も働き」と底点志向です(I テサロニケ 2:9)<sup>30</sup>。

パウロは奴隷身分から脱皮し、役職、ポジション、社会的地位を得てから、制度を変えようとはしませんでした。自由人になることより、徹底して奴隷の側ことどまって、解放の神学といえますか、神学を解放したのです。上からではなく、下からの解放です。

パウロは奴隷制度を肯定したのでしょうか。否、「人の奴隷となつてはいけません」と制度による抑圧を認めていません(I コリント 7:23)。物乞いすらできない見捨てられた「小さくされた人々」を放置する構造悪、抑圧、支配層の優位性に同意したのでもありません。キリストは、疎外階層、世、制度宗教からも排除され、怒り、苦しみ、くやしさを蓄える涙の革袋が張り裂けんばかりのオクロスと共苦しました。パウロはそのことを生き様により「宣教という愚かな手段」で証したのです(I コリント 1:21)。

しかも「奴隷」として。

#### <結論>

「解放の神学」の「救い」とは、「解放」です。逆説の神学です。「開発」、「発展」、「和」ではありません。「成長」、「進歩」、「一致」のスローガンによって抑圧する側とスクラムを組みません。罪にまみれた「霊」からの解放を目指すのでもありません。解放とは最終的に罪からの解放と解釈すると、罪を「疎外」として理解することでは昇華できないからです。常に「小さくされた人々のための福音」について、学派、イデオロギー、制度宗教を超えて、共同で声をあげます。キリストの神は、「天にいます」静止の神ではなく、動詞の神です。オクロスが呻く時、傍観者でいることはできない方です。「低きに御覧になる方」は八方塞がりとなった困窮する民のため、「私自身が共に歩み」と行動の神です(詩編 113:6, 出エジプト 33:14, 民数 22:22)<sup>31</sup>。パウロが被差別、奴隷、泣く者と共生される神と共に行動した足跡に倣いたいものです。

説教原稿を翌週、神戸国際支縁機構の村田充八理事に校正していただきました。また不明瞭な箇所について訂正していただきました事務局の翻訳家徳留由美氏、佐々木美和氏にも感謝します。

<sup>29</sup> 『天幕づくりパウロ』(R.F.ホック 笠原義久訳 新教出版社 1990年)。

<sup>30</sup> 『底点志向者』(深津文雄 かにた出版部 1999年 237頁)。深津は述べています。“上ばかり見て、そこから底辺をながめているから、手が出ないのです。底辺ではなく、底点まで降りて、そこで具体的に出会った『たったひとり』から始めればそれでよいというのです。その順序を間違えて、手をこまねいたのが教会です。頂点志向のなかで、上から数で処理しようというのが福祉です。”

<sup>31</sup> 『荊冠の神学』(栗林輝夫 新教出版社 1993年 346頁)。